

今週の為替相場見通し(2018年5月7日)

総括表		注	先々週と先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		107.67 ~ 110.05	109.08	107.50 ~ 110.20
ユーロ	(ドル)		1.1911 ~ 1.2290	1.1962	1.1750 ~ 1.2150
(1ユーロ=)	(円)		129.90 ~ 133.48	130.48	128.00 ~ 133.00
英ポンド	(ドル)		1.3487 ~ 1.4030	1.3526	1.3350 ~ 1.3600
(1英ポンド=)	(円)	*	147.07 ~ 152.73	147.65	145.50 ~ 148.50
豪ドル	(ドル)		0.7473 ~ 0.7683	0.7542	0.7500 ~ 0.7700
(1豪ドル=)	(円)	*	81.67 ~ 83.10	82.27	81.00 ~ 83.80

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替市場第一チーム 森田 大貴

(1) 今週の予想レンジ: 107.50 ~ 110.20 円

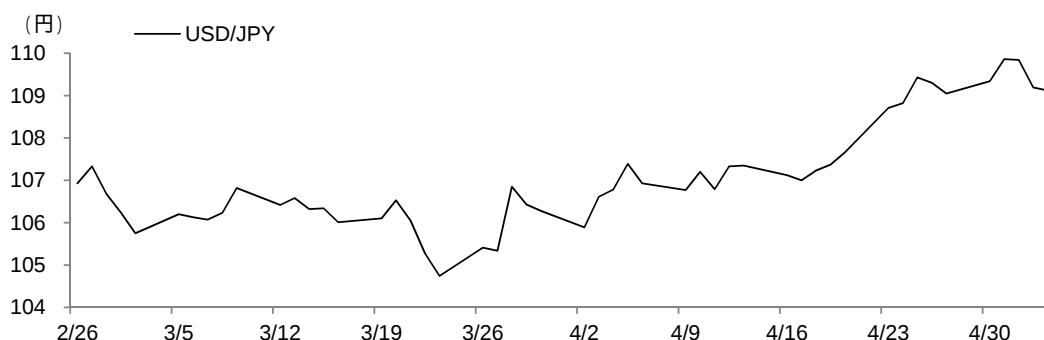
(2) ポイント【先々週と先週の回顧と今週の見通し】

先々週から先週にかけてのドル/円相場は、先週週央にかけて上昇し、その後は上げ幅が縮小する展開となった。4月23日に107円台後半でオープンしたドル/円は、週末に北朝鮮情勢を巡る緊張緩和や、米10年国債金利が3%近辺まで上昇したことを背景に108円台後半まで上昇。24日も良好な米経済指標に加え、米10年国債金利が3%を突破する展開に109円台前半まで続伸。この水準では利益確定の売り意欲は強く、また米株が大幅に下落すると円買戻しが強まり108円台半ばまで反落する場面も見られたが、25日は米株が下げ幅を縮小する動きに加え、対ユーロを中心にドル買いの流れとなり109円台半ばまで上伸。27日の日銀金融政策決定会合には特段の反応なく109円台前半での推移が継続。その後、米1~3月期GDPが予想を上回り、109.50円超えとなる場面も見られたが、米金利上昇が続かず利食い売り優勢となり一時109円割れまで下落。翌週30日は前週からのドル買いが継続し109.40円超へじり高。月末絡みの売りに加え、米株がマイナス圏に沈むと一時109.10円割れとなる場面も見られたが下値は限定的で、翌5月1日もドル買いの動きが続き、110円手前まで上昇。2日もFOMCを前にドル買いの動きが継続し、110.00円をブレイクし110.05円をつけた。FOMCはややハト的と捉えられ一時下押ししたが、すぐに底堅い動きとなった。3日は、米中通商懸念などを受けリスクオフの動きとなり上値重く推移。更に米4月ISM非製造業景況指数が予想を下回ったことから、一時109円割れまで続落。4日、米4月雇用統計は、非農業部門雇用者数、平均時給上昇率とともに市場予想を下回ったことからドル売りが強まり、一時108.65円まで下落。その後は米株や米金利の反発とともに109円台まで買い戻されたが上値は重く、109.08円で越週した。

今週のドル/円相場は揉み合いを予想。足元のドル/円は、北朝鮮情勢の緊張緩和や過度な貿易戦争懸念の後退を背景にリスクセンチメントが改善する中、米金利の上昇とともに為替市場全般でドルショートのアナウンスメントの動きとなり、テクニカルにも、一目均衡表の雲や、年初からの下落でポイントとなった108円を上抜けて一時110円超えまで上昇する動き。ドルインデックスも92を超えて上昇トレンドを続ける中、先週のイベントを経ても相場の流れを変えるような材料はなく、ドル買いの動きが継続しやすいだろう。一方で、海外勢を中心としたドルショートの影響も既に一巡しており、需給環境に鑑みても110円付近では本邦実需、機関投資家ともに旺盛な円買い意欲が確認されている。米金利の上昇も一服している状況下、目先ドル買いを期待するようなイベントも控えておらず、ドル/円の上値は限定的か。

(3) 先々週と先週までの相場の推移

先々週と先週(4/23~5/4)の値動き: 安値 107.67 円 高値 110.05 円 終値 109.08 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.1750 ~ 1.2150 128.00 ~ 133.00 円

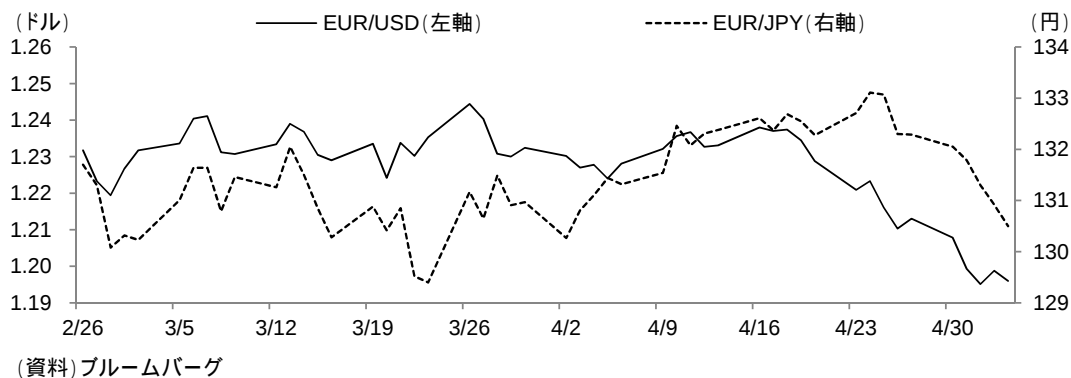
(2) ポイント[先々週と先週の回顧と今週の見通し]

先々週から先週にかけてのユーロ相場は下落する展開。週初23 日に対ドルで1.22 台後半、対円では132円台前半でオープン。対ドル・対円でそれぞれ一時週高値となる1.2290・133.48円をつけたが、ユーロ圏4 月製造業PMI が予想をやや下回る結果になると対ドルで1.22 近辺まで軟化した。24 日は独4 月Ifo 企業景況感指数が市場予想を下回ったことを受けて対ドルで1.21 台後半まで続落したが、ビルロッドガロー仏中銀総裁が「ユーロ圏の成長鈍化は一時的なもの」と発言すると1.22 台前半まで値を戻した。25 日は翌日のECB 政策理事会におけるハト派な結果に対する期待等から1.21 台前半まで値を下げた。26 日はドラギECB総裁が会見で「引き続き底堅い成長を見込んでいる」と発言したことを受けて1.22 台を回復したが、月末絡みのドル買いや、ドラギ総裁のスタンスがハト派と見られたことから対ドルで1.20台後半まで下落。27日は前日の流れを引き継ぐ格好で対ドル・対円でそれぞれ週安値となる1.2055・131.90円まで下落した。その後小幅に水準を戻し対ドルで1.21台前半、対円では132円台前半で越週した。30日は対ドル・対円でそれぞれ一時週高値となる1.2140・132.54円をつける局面もあったが、独3月小売売上高や独4月CPIの冴えない結果を受けて対ドルで1.20台後半まで下落。1日にかけてもユーロ売りの流れが継続する中、対ドルで1.19台後半まで続落。2日は全般的なドル買いの流れの中1.19台半ばまで値を下げるも、FOMCの声明文がハト派と受け止められる内容になると1.20台前半まで急反発。しかし、再び全般的なドル買いが強まると1.19台前半まで急落した。3日は米株の軟調推移を背景に対円で130円台前半まで値を下げると対ドルでも連れ安となり1.19台半ばまで下落。4日は米4月雇用統計が市場予想を下回った事などからドル売りが強まり1.19台後半を回復するも、すぐにドル買いの流れに転じると対ドル・対円でそれぞれ週安値となる1.1911・129.90円まで下落。その後は水準を戻し対ドルで1.19台半ば、対円では130円台半ばで越週した。

今週のユーロ相場は上値の重い推移を予想する。先月26日に開催されたECB理事会後のドラギ総裁の会見では、「引き続き底堅い成長を見込んでいる」との発言があった一方で、「金融政策そのものについては議論しなかった」との発言もあり4月半ば以降続いているユーロ売り優勢の流れを止めるイベントとはならなかった。過去数か月間はユーロ圏の経済指標の下振れが目立っており、今後の動向を見極める必要があることも併せて考えると、QE終了時期に関する決定は6月会合ではなく7月会合まで持ち越される可能性が高そう。足元ではECBの緩和縮小に対する期待感だけを背景としたユーロ買いは一服しており、QE縮小に関する具体的な進展があるまでは積極的なユーロ買いが盛り上がりづらい展開が続きそうだ。また、足元では全般的なドル高地合いが続いている。先週のFOMCや米4月雇用統計の結果はドル売りにつながる内容ではあったものの、今後の利上げ期待を大きく後退させるほどのものではなく、今週もドル高トレンドは継続すると予想。ユーロの下げは速いペースで進んできているだけに調整の動きが入る局面も想定されるものの、基本的にはユーロ売り優勢の流れが継続し、上値の重い推移となると予想する。

(3) 先々週と先週までの相場の推移

先々週と先週(4/23~5/4)の値動き: (対ドル) 安値 1.1911 高値 1.2290 終値 1.1962
(対円) 安値 129.90 高値 133.48 終値 130.48



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3350 ~ 1.3600 145.50 ~ 148.50 円

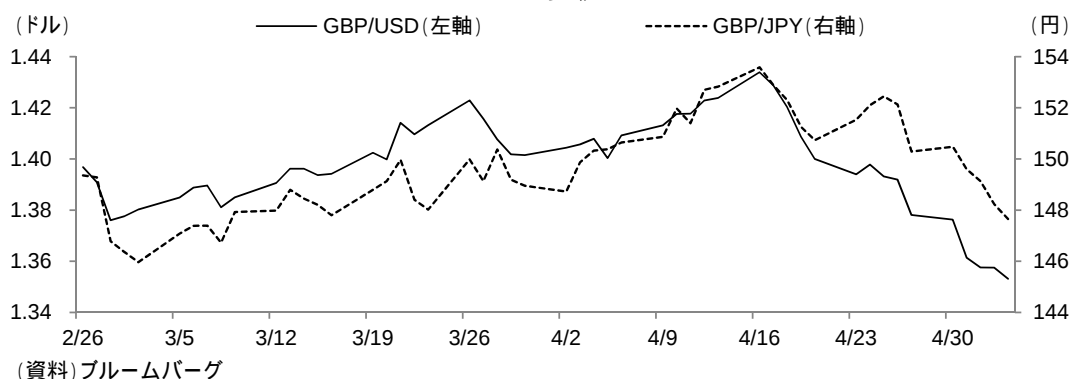
(2) ポイント[先々週と先週の回顧と今週の見通し]

先週・先々週の英ポンド相場は、下落。対円、対ユーロなどでは、26日に天井を打つまで、むしろ堅調気味の推移が先行したが、その後、下落。対ドルでは、ほぼ一方的な下落を続けた。この間の主要通貨市場では、ドル堅調が先行した。ドル堅調の背景としては、米金利上昇が盛んに注目されたものの、米金利上昇の理由に関しては、米10年物国債の利回りが3%を突破したことで市場の脚光を浴びたことなど、漠然とした思惑以上の材料は確認できなかった。26日の欧州中銀理事会は、予想通り政策金利などを据え置いたが、ドラギ総裁が引き続き金融引き締めに消極的な姿勢を示したとの読みで、ユーロが軟調に反応。ポンドも対ユーロでは一時明確に水準を切り上げた。27日以降のポンド全面安には、同日発表された英1~3月期GDP速報値の下振れという、分かり易いポンド売り要因があった。市場予想の中心が前年比+1.4%にあったところ、発表は同+1.2%だった。この発表前までに、英中銀による5月利上げ見通しは大幅に後退していたものの、同発表が僅かに残っていた利上げ期待を概ね払拭する形で、ポンド全面安を誘った。その後は、特段の材料も見当たらないまま、ポンドは軟調に推移。ドル/円が110円を突破した(2日)達成感から、軟調に転じると、円が全面高に振れ、その後週引けまで、ポンド/円の続落がポンド軟調を引っ張った格好になった。

今週の英ポンド相場は、足元軟調推移の継続を予想。10日の英中銀金融政策委員会では、基準金利の0.50%据え置きが幅広く予想されており、その限りであれば、ポンドへの影響は考え難いだろう。同時に発表される英中銀四半期インフレ報告書には、今後の金融政策動向を見極める上での手掛かりが求められる。年初来の英中銀の強気と足元経済指標の減速のギャップを鑑みると、強気の(早期利上げを示唆する)内容にポンドが上昇する反応よりも、弱気の(利上げ見送りを示唆する)内容に、ポンドが売られる可能性の方が、より警戒されるのではないか。ポンドの値動きに直接どこまで影響したかは不透明ながら、英のEU離脱交渉を巡っては、ここもと興味深い動きもいくつか見られた。29日辞任したラッド前内相の後任として、30日にジャビド内相が就任。EU残留派だったラッド前内相の後釜に、EU離脱派で知られたジャビド内相が就任したことで、メイ内閣内の離脱派/残留派のバランスは、一段離脱派寄りに傾くことになった。一方で、3日投票された英地方選では、議席数だけを見れば保守党が議席減、労働党が議席増という結果が出たものの、「政権与党が不利」という地方選の傾向を考慮すると、二大政党の優劣ははっきりしないとの受け止め方が支配的。ただし、明らかな敗者が議席のほとんどを失った英独立党で、明らかな勝者が(親EU政党でもある)自由民主党だった点は疑いようもない。メイ首相の内閣・与党掌握力の低下が言われて久しいが、この間も、英のEU離脱交渉に関しては、関税同盟やアイルランド/北アイルランド国境問題などを巡って空転が続いている。地方選の結果が、中央政界にどこまでの影響を及ぼすかは不透明ながら、少なくとも離脱派の勢いを強める結果でなかったことだけは確か。英政府内の意見調整が進まず、ひたすら時間の浪費が続くことが、ポンドに好影響を及ぼすとは考え難い。

(3) 先々週と先週までの相場の推移

先々週と先週(4/23~5/4)の値動き: (対ドル) 安値 1.3487 高値 1.4030 終値 1.3526
(対円) 安値 147.07 高値 152.73 終値 147.65



4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.7500 ~ 0.7700 81.00 ~ 83.80 円

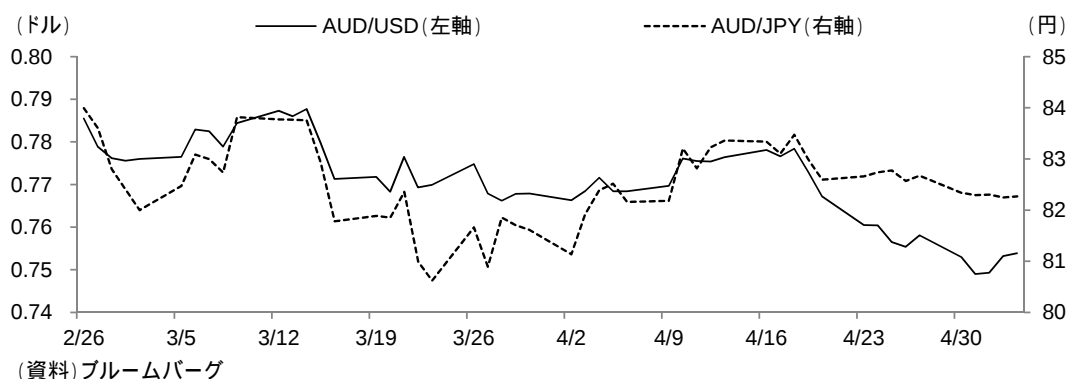
(2) ポイント[先々週と先週の回顧と今週の見通し]

先々週、先週の豪ドル相場は、軟調推移となった。まず対ドルでは、先々週の週初4月23日0.76台後半でオープン。週高値0.7683をつけるも、米金利が上昇する地合の中でドル買い優勢となり、年初来安値を下抜けて0.76ちょうど近辺まで下落した。翌24日に発表された豪1〜3月期消費者物価指数(CPI)が予想を下回ったことや、週央25日には米10年債利回りが2014年1月以来となる3.0%台にのせたこと等から豪ドルは売り優勢となり、0.75台半ばまで下げ幅を拡大。26日には米10年債利回りが2.9%台まで低下したものの、ドラギECB総裁が「インフレの上向きトレンドの確信が無い」との発言がややハト派的と捉えられてユーロ売りドル買いが入ったことで、豪ドルは0.75台半ばで揉み合い推移。但し、ドル買い優勢となる中で週末27日に0.7532と年初来安値を更新し、0.75台半ばで越週した。先週の週初4月30日は0.75台後半でオープンした後、週高値0.7582をつけるも上値は限定的。翌5月1日、豪州準備銀行(RBA)は予想通り政策金利の据え置きを決定し、市場への影響は限定的。その後、トランプ米大統領がEU・カナダ等に対する鉄鋼・アルミニウムの関税適用を1か月先延ばしすると伝わるとドル買いが強まり、年初来安値0.7473まで下落。週央2日、発表された米FOMC声明文でインフレ見通しが上方修正されるも、一部市場参加者が見込んでいた利上げ加速観測を強める内容とはならなかったことで、0.75ちょうどを挟んだ揉み合い推移となる。翌3日、発表された豪3月貿易収支が予想を上回る貿易黒字となったことが好感され0.7542まで反発。週末4日は0.7560まで上昇したものの週高値を更新するには至らず、0.75台前半で越週した。次に対円では、先々週の週初4月23日は82円台後半でオープン。翌24日こそ週高値83.10円をつける局面があったものの、ドル買い地合から豪ドルが対ドルで軟調推移となる中ドル/円が上昇したことで、豪ドル/円は82円台後半を中心としたレンジ推移。週末27日に週安値82.37円をつけた後、82円台半ばで越週した。先週の週初4月30日は82円台半ばでオープン。対ドルで年初来安値まで下落する中、小幅ながらレンジを切り下げ82円台前半を中心とした値動き。週央5月2日にドル/円の上昇につれて82.65円の週高値をつける局面があったものの上値追いつとはならず。寧ろ週末4日にかけてはドル/円が下落に転じる中で週安値81.67円まで下げる局面もあった。結局、82円台前半で越週した。

今週の豪ドル相場は反発を予想する。先週半ばまでは米金利上昇に牽引されてドルが上昇していく中で豪ドルは売られていた印象。しかし、先週半ばに発表された米FOMC声明文では、次回6月会合での利上げへの地均しはなされたものの、それ以上に踏み込んだ内容ではなかった印象。また、先週末に発表された米4月雇用統計では非農業部門雇用者数が予想を下回っただけでなく賃金上昇も予想されたほど伸びなかった。また、週後半に行われた米中通商交渉は今後の議論の枠組みづくりについては一致したものの、大幅な貿易赤字削減を迫る米国と、ハイテク製品等の対中輸出制限緩和を求める中国との間でいつ合意に達するかは不透明さが際立った印象。これらを受けて米10年債利回りも一時2.91%台まで低下しており、先週前半までのようなドルが強含み続ける地合は薄まっているように感じる。他方、豪州に目を転じれば先週発表された豪3月貿易収支で貿易黒字が確認されるなど明るい材料も出ている。このところ原油価格等、一部の商品価格の上昇も見られており、一旦は豪ドル反発の週になると予想。注目のイベントとしては、8日(火)豪州2018/19年度予算案発表、中国4月貿易収支、10日(木)米4月CPI等がある。

(3) 先々週と先週までの相場の推移

先々週と先週(4/23〜5/4)の値動き: (対ドル) 安値 0.7473 高値 0.7683 終値 0.7542
(対円) 安値 81.67 高値 83.10 終値 82.27



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。